

作文指導を基礎とする小学校国語科教師養成カリキュラムの開発(2)

——「対話環」理論の現象学的基礎づけ——

村 井 万里子

(キーワード：国語科教育本質論，現象学，対話環，作文指導)

I 国語科教育に要請される原論的研究の問題一何のための本質論か（現状の要請）

教育の現状には、いま、見過ごすことのできない、問題が起こっている。1980年代の終わりごろから、明らかに、人間の根本を育てる「教育」に関わりがあると見られる青年・少年の事件が次々に報道されるようになってきた。そのなかのいくつかは「大事件」として世人の耳目を集めたが、そのような大事件の背後に、一見目立たない姿で日常的に「人間が育つ」現状の危機が現れている。いずれも、私が身近に直接経験したことで、おそらく現在では誰にとっても珍しくないことである。それは、たとえば以下のようなことである。

○JR 新幹線の新神戸駅で、真新しいベビーカーを押しながら歩いている20歳前後と見える若夫婦。ベビーカーに乗っている1歳未満らしい赤ん坊がワンワン泣いているのに、抱き上げもせず、気に掛かる様子も見せずに夫婦で互いに談笑しているのを目撃。(30年前なら、年配の人間がかけよって、赤ん坊を抱き上げるか、若い父母を叱るかしたかもしれない。そういった空気が全くないことも、衝撃のひとつである。) 例①

○子どもを「おんぶ」している母親の激減。ここ5年ほどで見かけたのは、韓国で見かけた数度と、日本国内では高速バス乗り場でバスを待っていた2人の子どもを連れた若い母親のみ。3歳くらいの女の子の手を引き、赤ん坊を背中におぶったその女性は、折りたたみ式のベビーカーも持っていたが、時間が近づくとさっとそれをたたんで赤ん坊をおぶった。ベビーカーに赤ん坊を乗せていた間、女の子はしきりに赤ん坊の足をいじり、話しかけていた。「おんぶ」は近頃実に珍しい光景になってしまった。例②

○教師をめざして大学で学ぶ学生に、小・中・高校時代を振り返って「作文」の思い出を書かせると、「〇〇年生のとき、作文コンクールで賞をもらったが、それは先生の手が入って自分の文章だとは思えなかった。だから賞が少しも嬉しくなく自信にもなっていない。」という思い出を書く学生が増えたこと。例③

○小学校教師の話：低学年で日記や作文を宿題に出すと、親の手が入っているとわかる文章が珍しくないそうである。また誤字を赤ペンで直さずに返すと、「指導していない」とクレームをつける親が多い。例④

○親の立場からの話：我が子が宿題の日記や作文をやりたがらないので、励まし励まし、無理矢理に書かせている。子どもは泣きべそをかきながら、やっと書く。こんな宿題の出し方はやめてほしい。例⑤

○大学生：インターネットで探した情報を、コピー＆ペーストで組み立てて、自分の書いた文章であるかのような文体で（すなわち出所を示さず）レポートとして出す学生がめずらしくない。例⑥

○ネット上で「読書感想文」の実例や書き方を示したHPを開設した中学校教師が、「アクセスがものすごく多かった、しかも感謝の声が多数寄せられた」と報告している。例⑦

上記に列挙したなかには、「ささいなこと」と笑い捨てられそうなことも含まれている。しかし、いずれも、ある本質的な問題を指し示している。それは、人と人とのやりとりのなかに、心と知恵が育つプロセスが含まれている、という共通理解が失われかかっている、という問題である。私は、「人と人とのやりとりによって心と知恵が育つ過程」を、「対話環」と名付け、上記の問題は、この「対話環」の崩壊、もしくは機能不全から生じていると考える。この「対話環」の働きは、新しい概念ではない。古くから日本の文化のなかに埋め込まれ、受け継がれてきたものであるが、直接の目に見える「形」として表したのは、1943年の山口喜一郎の講演（研究発表）資料である。この講演ではこの円環図形に名前は付されていなかったが、のちに1947年の著書（遺稿集）では、「表現と理解の弧」と呼ばれている。

この1943年の講演「対話としての言語活動の特徴」で山口は、日本語教育の実践原理を「直接法」のなかに追い詰め、「日本語の直接法教習は、その言語を言とする言語活動を営むことを本領とする」という1行に核心を統括した。さらに、「教習」が教師の「教授」と生徒の「学習」の対等の「営み」であることを述べ、ソシュー

ルの言語論の用語（言＜パロール＞、言語＜ラング＞、言語活動＜ランゲージュ＞）を用いて、
「真の言語活動は言語について行われることではなくて、言について行われることであり、（中略）言語が言となるに至って始めて生命を得て言霊をあらわにするのであります。言葉の生命の有無と言霊の有無とは、決してその形態相貌によるものではなくて、言語活動の過程を経たか否やにかかって決するのであります。」
と言い切っている。

山口が日本語教育を「直接法」に本領があると確信してその理論を追究し、主著「外国語としての我が国語教授法」（昭和8）を著すに至る大正から昭和はじめにかけて、国内では垣内松三が、形式・内容の二元論に陥った国語科教育を救い出すために「形象理論」を形成しつつあった。垣内は、富士谷学派の国学の理念をもとに、西欧の心理学・哲学に広く手がかりを求め、とくに当時最先端の思想であった現象学に深い関心をもって、形象理論に取り入れた。垣内が特に傾倒したのは、『文学の形態学的研究』を著したロマン・インガルデンであったが、ドイツの心理学者 K. ビューラー著『言語理論』にある「言語の機関典型」と「言語の4相図」にも強い関心を寄せ、本居宣長の「まこと」論の図と組み合わせて統一的な言語論をつくろうと意図していたことが知られている。遺稿として後輩に残した「形象理論の相関図」は、図中の用語が独特すぎて、託された飛田・西原両氏とも、その存在を世に紹介するのみで解説することができなかった。この相関図が、ビューラーの4相図に基づくことはその欄外のメモ（W・G・H・A）によってまちがいない。しかし、図の中に書きこまれた「〇〇学」は、垣内独自の理念で、ビューラーの図に即応したものではない。この図はその後発展させられず、垣内の「形象理論」も今日では、前時代的な旧思想としてほとんど顧みられることがなくなっている。「現象学」との関係には一時研究的関心の眼が向けられたことがあったが、本体の現象学そのものが急速に力を失うにつれて、形象理論への関心も弱まった感がある。しかし、言語本質論、及び言語教育原論として、「言葉の意味」の「理解」と「表現」の「深さ」を取り出し、人間の言語能力の価値的審級（上達・発達）に関心を示した形象理論には、まだ汲み尽くされていないアイディアがひそんでいとみられる。とくに、山口喜一郎の「対話環」と結びつけることによって教授・学習活動の機構と展開の急所を明らかにできるのではないか、というアイディアを私が得たのは、修士論文研究を提出した1984（昭和59）年の昔になる。このアイディアは、その後満足に展開できないまま、25年の長きを経過した。

昨年、思想界ではすでに過去の思想とされる「現象学」の再評価をめざす、竹田青嗣の『現象学は＜思考の原理である＞』を知り、同書を通読して、この「甦る」現象学の側からもう一度「山口・垣内理論」を展開できるのではないか、という希望をもった。理論のための理論でなく、また方法を指示するための理論でもなく、国語科教育研究としては冷遇されている「本質論」と「評価」（理解、表現の解釈）研究のために、この理論を取り上げる意味があると考えた。平成10年以降現場に強制された「評価基準」の考え方を、望ましい正当な理念に立て直すためにも、この理論は大きな役割を果たすと考えられる。

Ⅱ 国語科教育と現象学

国語教育・国語科教育学の研究分野は、大きく以下のように区分できる。

1. 国語（科）教育原論（言語論・指導論・教材論・学習論・教師論）
2. 国語科教育実践論（授業研究論・単元構成論・カリキュラム論・教材研究論・学習者研究論）
3. 国語教育史（国語教育学史・国語科教育実践史）
4. 比較国語教育学（各国の1～3）

本論考は、上記のうち、「1. 国語（科）教育原論」を「本質論」として確実に定位することをめざし、「現象学」の方法を参照して基礎付けをおこなう。

現象学的方法による国語教育「本質論」の定位は、国語教育史上では1920年代の垣内松三の試み（文献9参照）が最も早く、また広く知られている。しかし、垣内松三の仕事は、独特の用語と象徴的な述べ方が難解であり、また、20世紀初頭当時最も新しい哲学思想であった「現象学」そのものが国語教育人にとって専門外の分野に属す理論であったこと、同時に垣内松三自身も強い関心を示した自然科学的な客観的合理思想の力が特に第二次大戦後には圧倒的な思想的優位性をもち、教育の科学化運動が戦前よりも勢いを増して一般化したことも理由となって、哲学的な「本質論」は今日あまり顧みられなくなっている。

1970年代に文学と教育界の関心を集めた「読者論」の一部には、「読書の受容美学」を構築した W. イーザーなどの現象学的影響が強く見られたものの、今日、国語（科）教育原論構築に関連して研究者の興味を引いているのは、ビゴツキー・ルネッサンスに触発された心理学の理論や、現象学の後に現れた「構造主義」、次世代の「ポスト構造主義」に見られる「反哲学思想」としての科学的な「言語論」、そして「構成主義」、最近では持続的存続を可能にする仕組みを追求する「オートポイエシス理論」などである。

本稿の著者にこれらの個々の思想を的確に説き分ける力量はない。しかし専門外の人間にもわかるように今日の哲学的思想の現況を説いた下記の書物3冊を読んで、垣内松三が道半ばで途絶した「現象学的方法」を再び展開し、自然科学的ないわゆる客観的合理理論とは異なる「本質論」による「国語教育の基礎づけ」が必要であることを確信した。本稿は前稿に引き続いてその第一歩である。

先にのべた「3冊」は、下記 ABC の書物である。刊行時期の古い順に示す。

＜現象学を用いた国語（科）教育「本質学」最後の試み＞：垣内松三『国語の力（再稿）』牧書房1947

A：中村雄二郎『共通感覚論』岩波書店1979、著作集所収1993、岩波現代文庫 G 1 所収2000

B：木村敏『時間と自己』中公新書1982初版、（第19版1999年2月）

C：竹田青嗣『現象学は＜思考の原理＞である』ちくま新書2004年1月（初版1刷）

環境問題、エネルギー・食糧問題、民族・地域紛争問題を抱える現代の地球規模の問題に、人間がどう立ち向かっていくかは、そのままこれらの問題に立ち向かうことのできる人間をどう育てるかという教育問題でもある。いま明確になってきたのは、上記 C 竹田青嗣によれば、「自然科学の力」ではこれらの問題は解決できそうにない、という事実である。竹田は、哲学が中心問題にしてきた「認識論」に替わって、ここ30年間にわたって「思想の基底」として期待されてきた「言語論」の特徴と限界を指摘している。

本来、「国語教育学」の守備範囲はあくまでも「国語（言語）」にかかわる部分に限定されるが、現代思想として注目を集めてきた「反哲学思想の基盤としての言語論」には、言語の教育実践に携わる者からみて、驚くべき無理解が多い。即ち「ことば」とは何か、についての基本認識が、言語（国語）教育実践者のもっている言語観とは大きく異なり、思想的言語論の関心は意味と規則に集まっている。端的に言えば、それは『言語理論』（K. ビューラー）1935の唱えた「言語の4相」のなかの「言語規則」（Speech Gebild）即ち「言語の論理性」の一面のみを見ているといえる（教育においては「言語の4相」全体を総合的に捉えることが至上命題である）。この言語観の偏りを思想の研究者から明確に指摘したのが、竹田青嗣である。『現象学は＜思考の原理＞である』（ちくま新書）2004において竹田は、現代思想の中核に据えられた言語論が「言語のなぞ」の発見をもてはやしているが、それは「言語行為」（Speech Akt）の相に目を向けていないからにすぎないと、その言語に対する見方の欠落を明確に指摘している。竹田は、「言語行為」（Speech Akt）の相の重要性に気づいている。しかし、竹田の論にしても、「言語行為」相を中心に据えて他の3相を構造的・機能的にとらえることはしていない。現代思想の基底を支える可能性が期待されるならば、「言語論」改革は喫緊の課題である。

竹田青嗣は上記 C の書物のなかで、現代思想の「言語論」への期待が、人類がそれぞれの民族・国家・宗教・階級の利害と理念の違いを超えて「共通の問題」を掴むために、「個別言語」の共通の部分・「普遍的規則」を取り出せるのではないかという考え方から起こったことを示唆している。60年代に始まったチョムスキーの「言語の深層構造」探究の試みはその代表であり、本稿筆者の大学在学時代は「生成変形文法研究」の最盛期であった。この研究はコンピュータによる自動翻訳機の開発に大きく寄与したとされる。しかし、チョムスキーの意図にも関わらず、彼が本来目ざした「民族・国家・宗教・階級の利害と理念の違いを超えて共通の考え方を掴む」という目標には手が届かず、理念上の空回りに終わった感が深い。

C 竹田によれば、特定思想の独我論を突き崩すために、思想の奥にある共通の「構造」を取り出そうとする「構造主義」、さらに、どの思想に対しても徹底的に「相対化」を行う「ポスト・構造主義」も、この“本来の目的”に到達できそうにないという。「構造主義」は「自然科学」がめざした「客観的真理」として期待されたが、結局自然科学と同じ限界が明らかになり、また「ポスト・構造主義」は、個別の思想の絶対性を打ち破って徹底した「相対化」を行うことには成功したが、それは結局「シノシズム（皮肉主義）」であり「ニヒリズム」に過ぎず、問題解決に向けての確たる「根拠」としての力を持たない、というのが竹田の指摘である。

C 竹田は、現象学こそ、現代の問題状況を救う決め手となる考え方をもたらずとして以下のように述べる。

「哲学の原理というものはそれほどいいかげんなものではありません。『現象学的還元』の方法は、近代哲学の流れでは、カント、ヘーゲル、ニーチェにつづく、つぎの原理的展開であり、ハイデggerがそれを越えかけただけで不十分な形で終わり、以後、どんな思想も思考原理としてこの先に進んではいけない、そのかぎり、それをひどい誤解の墓穴から掘り出して復活させることには意味があります。」p.29

竹田に先立ち、A 中村雄二郎は、哲学思想における認識論の流れをふまえて、「コモン・センス」と「共通感覚」の成立の考察を行った。A 中村の書物には、哲学史と精神医学と身体論的知覚の実証的研究の3つの異なる研究が「共通感覚」の表題のもとに取り集められている。3つが完全に融合・構造化されているとはいいがたいが、別領域から3つの射映が一つの事項（問題）に集められ、問題を立体的に浮き彫りにしている。B 木村敏は、A 中村の著書に「解説」を書いている精神病理学者である。精神病理の特徴を主体の時間感覚の位相によって説明した書物であるが、「第一部 こととしての時間」の「1 ものへの問いからことへの問いへ」は、日本語の「もの」「こと」の使い分けを用いて日本人の「こと」への感性の鋭敏さを説いている。ABC いずれもすぐれた啓蒙書であり、本稿の目的とする「対話環」の基礎づけに有効な視点を与えるものであるが、今回はとくに、C 竹田青嗣の「現象学」論を中心にすえて、「対話環」の構造と機能を明らかにし、現象学の考え方から国語科教育の本質論構築をはかってゆく。

Ⅲ 現象学の射程と「本質論」—竹田青嗣の仕事を手がかりに

(1) 目的と目標—「対話環」の基礎づけと「対話環」による基礎づけ

竹田青嗣『現象学は＜思考の原理＞である』2004や、『現象学入門』1989は、すぐれた現象学紹介の啓蒙書である。前書は「ちくま新書」の「シリーズ人間学」の1冊で、もともと2001年から2002年にかけて開催された「連続講座・人間学アカデミー」第1期講義録をもとに新書のために文章化されて成立したものである。講義がもとになっているので、談話体ふうの話しかける文体で書かれており、初めて現象学にふれる素人にも分かるように、専門用語を多用せず、情報量を少なくしてポイントを核心に絞り込み、全体視野の確保を図りつつ素朴な疑問を先回りしながら懇切に説かれている。後者は、NHK ブックスの1冊で、2008年の時点で38刷となっている。竹田の著書の特徴は、読み手として想定しているのが哲学研究者でなく、門外の素人に訴えようとしていることで、「わかりやすさ」（啓蒙）を最も重視して書かれている。「国語（科）教育本質論」に参照する立場からは、岩波新書の内田義彦『読書と社会科学』『社会認識のあゆみ』と肩を並べる出色の啓蒙書であろう。

竹田青嗣『現象学は＜思考の原理＞である』2004の内容を、目次によって以下に概観する。

目 次（原著から引用）	キーワードによる要旨の素描（村井）
シリーズ・人間学とは何か 小浜逸郎	シリーズ成立の由来，1ヶ月半前「9.11テロ」
序 現象学は哲学の可能性を拓く	全体構想「4つの枠組み」
Ⅰ 「思考の原理」としての現象学 1 現象学的「還元」とは何か 2 認識，真理，普遍性 3 「確信成立」の条件を解明する	・自分からの観点，客観的な観点の二重性を前者一本に還元 ・「還元」への誤解 ・還元の実例から還元の本質を受けとる ・万人にとっての共通構造＝本質（信憑構造）
Ⅱ 時代閉塞を乗り越える原理—現象学の射程 4 「信念対立」を克服するために 5 哲学は社会原理を立て直す 6 イデオロギー的思考の終わらせ方	・宗教対立を背景とする「市民社会」原理 ・近代社会思想のあゆみ・ポストモダン思想 ・ハーバマスの対話思想 ・何が公共問題か ・イデオロギー的思考の暗黙の前提を解明
Ⅲ 言語の現象学 7 現代言語学の挫折 8 「言語の謎」を解く	・人間原理論としての言語論（①身体論の基底，②人間関係の基礎） ・「観念」でなく「言語」を ・パラドクスの袋小路 ・ゲームの本質把握

9 「意味」とは何か	・「一般的意味」と「企投の意味」の関係
IV 「欲望論」原論 10 「意味」と「価値」の原理論へ 11 <世界>そして<身体> 12 幻想的身体性 13 エロティシズムの「起源」	・「欲望論」＝身体論・社会論・資本主義システムの制御・主体の「社会的自己決定」と「自己肯定」・人間の生を支援する価値基準を ・「欲望論」の構成・生きられる世界（時空） ・<世界>の「身体＝欲望相関性」構造
結 現象学は「本質」についての学である	・意味と価値の編み換えを続ける「関係の世界」
あとがき	・本質学としての現象学の可能性

以下に、中核的な理念が述べられている箇所を引用する。

「はっきり言わなくてはならないのは、これまで現象学者（あるいは現象学批判者）といわれる人々のほとんどは、「現象学的還元」という方法の核心的な意味を理解しなかったということです（中略）。まさしくそのために、議論は、つねに数学や論理学や発生的現象学や身体論や未翻訳の文献のフッサールの断片的言葉についてのスコラの議論を、つまり標本的研究対象をめぐることになったのです。」p.30

「『現象学的還元』がどのような思考の方法であるか。これは、現象学全体を理解するための要であり、ここから一切が展開されます。あえて言うておくと、『現象学的還元』という方法は、ある意味できわめてシンプルな考え方であり、もし適切に示されればどんなスコラ議論もなしに誰でも理解できるものだと思います。しかしその射程はかぎりなく遠大です。それが優れた『思考原理』というものの特質なのです。」p.30

これまで現象学関係の本を覗いてははじき返されていた私は初めてまがりなりに全体をつかむことができた。

(2) 現象学的還元とはどういうものか

「現象学」理解の要であるといわれている「現象学的還元」とはどういうものか。

竹田はまず『哲学事典』での「現象学的還元」の解説文を引いて、その「わからなさ」や「誤り」をていねいに説く。このいわば「素人向け」の解説の“かゆいところに手が届く”ような親切さは、教育者のとってもって手本としたいところである。『哲学事典』の解説本文はのぞき、竹田自身の説明のみを以下に引く。

「とりあえず（引用した事典本文の）ここまでで言われていることのポイントは二つです。まず第一は、われわれはふだん世界を自然な『客観的視線』で見ているがこれを『自然的態度』と呼ぶこと。また、『現象学的還元』とはこの自然なものの見方をいったん止めること（＝判断停止）を意味し、それは『超越論的還元』とも呼ばれている、ということです。ここまでだと、還元とはわれわれの自然なものの見方をいったん中止することだ、ということしか分かりません。」p.32

「つぎのポイントは次のようなことです。『還元』の視線をとる。すると『自然で客観的な世界』は、個人の『意識』（＝純粹意識）に『還元』（＝内在化）される。だがこれだけでは、『わたしにとって』の世界が還元されただけなので（『自我論的還元』）、『他者にとって』の世界は還元されないで残っている。そこで『間主観的還元』によって、残りの『世界』を全部還元する。（引用者改行）

こうして、『自我論的還元』と『間主観的還元』をあわせて、世界全体の『還元』が完成し、世界は完全に意識にとっての『現象』となる。そこでこの『意識現象』を分析して、その相互関係や本質関係を把握することが『現象学的還元』である。そういう解説になっています。」p.32

このように、事典の解説文は「還元」に2種類あることを説明している、と内容をすっきりさせた上で、竹田は次のように続ける。

「はっきり言うと、この解説では『間主観的還元』の概念についての典型的な誤りが見られ（*）、そのため『還元』とは何かが、ほとんど理解できないものになっています。そこで、補いながら解説し直してみます。」

この（*）は文字のポイントを落として以下の補遺を行っている。

「*この解説では、『自我論的還元』では『私にとっての世界』が還元されただけで『他者たちにとっての世界』は還元されずに残ることになっているが、これは間違い。『自我論的還元』は事物の存在的確信についての還元で、『間主観的還元』は、主体としての他者の相互的存在確信についての還元。フッサールの構図は、われわれがもっている『客観世界』という自然な確信は、単に自分にとっての世界の存在確信だけではなく、他者たちもまたこの世界を客観的なものとして確信している、という自分の確信によって強

められ確実なものとなる、というものだからだ。」 p.33 (下線引用者)

この「補遺」中にある、「客観世界が確かにある、という確信は、単に自分自身が確信しているという理由からだけでなく、『他者たち』もまた同じように確信しているにちがいない、という『自分の』確信によってさらに強められている」という一節は、後に述べる「対話環」の働きを意味している。

竹田は、では正しくは「還元」とはどういうものかについて、以下のように述べる。

「人間は、基本的に二重の視線をもっています(引用者が文を変形)。『実存的な(=主観的な)視線』と『客観的な世界視線』です。これを使って言うと、要するに、『現象学的還元』とは、われわれはこの二重の世界視線をもっているけれど、いったんこれをすべて片方に、つまり『実存的な世界視線』に置き戻せ、ということなのです。しかしこれはどういうことでしょうか。」 p.33

これに続けて、竹田は幼い子どもが「かくれんぼ」をするとき、はじめは「頭隠して尻隠さず」という状態で隠れることがあるが、経験を重ねるにつれて、相手と自分の位置関係を客観的に思い描き、この“想像的視線”によって相手の視線からすっぽり身を隠すという能力を身につけていく。これが「客観的視線」である、と述べる。さらに、「ところで、この場合も人は、実際に『客観的視点』を手に入れるわけではない。彼が実際にもっているのはあくまで『自分からの視線』だけですが、しかし経験によってそれから『想像的視線=客観的な視線』を“構成する”能力を身につけるわけです。」と説明している。以上を総括して、

「つまりこの『想像的=客観的な視線』が、ここでいわれている『自然的、客観的な態度』です。そして、フッサールが自然な世界像を『還元』せよと言うとき、それが意味するのは、われわれのもっている『客観的な世界視線』は、実際は『自分からの視線』(主観的な視線)から“構成”されているから、これをいったんすべて『自分からの視線』に置き戻すことができる、まずそうしてみよ、ということです。これが『自然的態度』を判断中止して(エポケーして)純粋意識に『還元』する、ということの内実です。」

とまとめている。このまとめは、きわめて分かりやすい。だが、専門外の者からみてさらに親切的な言及は、素人ならばまず必ず抱く疑問、すなわち「なぜこの『現象学的還元』が必要なのか」の答えを明確に前に出している点である。現象学研究の専門家ならば、このような疑問は当然分かっているにちがいないと私は思っていたが、竹田によれば、どうやらそうとは限らぬようである。

(3) 「現象学的還元」はなぜ必要か

竹田は次のようなことばで、この問いの重要性を述べている。

「世界の一切を意識経験に『還元』するとは、すなわち『客観的な世界視線』をすべて『実存的=私的な世界視線』に置き戻すことですが、なぜこのことが必要なのか。そしてまた、なぜこの還元の方法の意味が適切に理解されてこなかったのか。これが肝要の問題です。」 pp.34-35

竹田はまず後者の「なぜ還元の方法の意味が適切に理解されてこなかったのか」の理由について、つづめて言えばあっさりと、「フッサールの説明のしかたが悪い」と結論づけている。

「この作業がなにゆえに必要なのか、については、フッサールは『イデーンⅠ』で明確な解説をほとんど行っていない。その続き『イデーンⅡ』でも言っていない。『デカルト的省察』や『危機』(引用者注、『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』のこと)で少しずつ、しかしきわめてまずい仕方では言っていない。全体としてフッサールは、現象学的方法の核心的意味について、きわめてミスリーディングな仕方ではこれを言いえていない。それがフッサールの現象学がこれほどまでにひどい誤解を受けてきた第一の理由です。」

p.35

専門外の我々には、「なあんだ、そうなのか」と思わせる記述である。しかし、この「記述のまずさ」はフッサールが故意にわかりにくくしているのではなく、竹田によれば、「おそらくその理由は、フッサールが現象学的還元の意味を、いわば七割しか自覚していないと言える点があるからです。しかしそんな文句を言ってもはじまりません。」と言葉をつぐ。では、この困難をどのように突破すればよいか。突破の手がかりはあるのか。

竹田は、フッサールが実際に具体例で示している「還元の実例」から、意味を推測するほかはない、と結論づける。

「彼(フッサール)は上のような不明瞭な言い方で現象学的還元を説明したあと、それを実際に実行してみせます。かれは何を『還元』しているか。『知覚』という体験を現象学的に『還元』してみせているのです。そして、重要なのは、われわれは、彼が現に行っている『還元』の仕方からその意味を受けとる以外にない、ということです。」 p.43

ここに述べられていること、すなわち「説明は不十分でも、実例を十分に検討することで、意味・意義・働き

を推察することができる」という考え方は、きわめて重要である。幼児・児童のことばの成長を考察し育成を助ける言語指導の世界では、子どもが自分の現状について大人・教師のわかるように「説明してくれる」ことはあり得ない。指導者は、徹底して子どもの言語使用の実例を観察して、その意味を推察していくほかはない。子どもの言語解釈と、「現象学的還元」とは別のことであるが、個々の教師・研究者による「児童の言語・文章の解釈」という作業から、自分は確かな意味を取りだし得ているという「確信」がどのように生じるかは、まさに、この「現象学的還元」という方法に関わる問題なのである。

(4) フッサールによる「還元」例

竹田は、フッサールが行っている「還元」のなかから「紙の知覚」を還元するという著名な典型例を用いて、「還元」の解説を行っている。例によって、フッサール本人の翻訳を「完全解読文」として読者にわかりやすく解説し直している。この部分を読むと、現象学の基本用語はほとんど理解できるのではないかと実感した。長くなるが、竹田の「解読文」をそのまま引用する。

「薄暗がりの中に白い紙がある、としよう。私はこの紙の部分部分を見たり触ったりすることで、はじめはつきりしないこの紙の全体のありようを、徐々にたしかめていく。つまり、一枚の紙を具体的体験として『知覚』していく。こういう“部分部分を確かめつつ進むという体験”を『コギタチオ』とか『意識体験』と呼んでおく。

そのつどの『コギタチオ』は個々別々で、そこには多様性がある。しかし私はその体験の中で、『一枚の紙そのもの』をつねに意識している。このつねに意識されている全体としての、同一のものとしての『紙そのもの』は、『コギタチオ』ではなく『コギターツム』と呼ぶことにする。」p.45

この考え方が、垣内松三の「部分と全体の関係論」や「全体直観の重視」に関係してくるだろう。

「われわれは、たとえばある『意識体験』をそれ自身を『知覚』の対象とするということがある（これは体験自身の内省のこと）。しかしここで問題となっているのは、ふつうの『事物』『物』の知覚体験それ自体である。ここでの「物」それ自身は、現象学的な『意識』の内部では、『実的な成素』（リアルに存在する要素）とはいえない。これは、意識体験の中でそれ自体として『存在』しているわけではなく、一つの『想定されている全体』としてだけ存在していることが分かる。この意味で、『コギタチオは、それ自身として、おのれのコギターツムについてのコギタチオ』である（＝紙の諸部分についての具体的でリアルな体験の一つ一つは、まさしくその『一枚の紙』についての諸部分のリアルな体験、と意識されている）。」p.45

ここで描写されている「知覚の仕組み・プロセス」は、ごく当然の「一般感覚」であるといってよい。哲学はまさに、「分かりきったことを改めて捉えかえす」作業にすぎないといえる。

「またべつの例を挙げてみよう。

いまこの『紙』を知覚している、としよう。注意すると、この『知覚』という体験には、まず『注意を向けるということ』（『配意すること』）がある。それからさらに、知覚される対象は、どれも必ずある『経験の背景』をもっていることが分かる。『紙』の周囲には必ず、本とか、ペンとか、机とか、その他の諸対象が広がって見えている。それらもある仕方で私に『知覚』されている。それらはつぎのような構造をもっている。

私が『紙』に『配意している』間は、それらは現出していたが、明瞭には意識されていなかった。つまり、それらはいわば『背景直観（背景眺望）の庭』として『紙』の知覚の背後にあった。それらは不明瞭ではあったが、まったく意識になかったというわけでもない。その意味ではこの『背景直観』も一つの『意識体験』といえる。（引用者・中略）

この『背景直観の庭』についてさらに分析すると、ここである『変様』が可能であることがわかる。つまりこの『変様』とは、はじめに配意されていた対象から、それまで背景としてあった他の対象に、『「目差し」（＝精神的な目差し）を自由に向け換えること』である。[⇒ちょうど、薄暗闇の中を懐中電灯で、つぎつぎに新しい対象に光を当てることで、それらをよりはっきり見るようになるようになるに]」pp.45-46

ここは、国語教育界ではイーザーの『行為としての読書』でおなじみになった「主題－地平構造」の説明である。同書が「読書行為の現象学」と呼ばれたゆえんがわかる。この「知覚還元」の実例をもとに、「これだけの体験を自分の『意識体験』として適切に記述する」と、「そこにどういう『本質構造』を取り出すことができるか」－これがフッサールの主張の核心らしい。

竹田のこれを、以下の3点にまとめている。

「(1)まず意識体験として見た知覚体験の第一の特質は、実際には（実的には）『私』はつねに対象の一部しか知

覚していないが、それを『対象全体』として、あるいは対象全体の一部として知覚している」p.47

端的に言い換えれば、「われわれが“現に”知覚しているのは一部だが、それをおしてつねに全体を志向的に知覚（＝感得）している」p.47ということである。この仕組みをうまく使えば、ありもしないものをあるかのごとく「直感」させることもできるな、とは誰でも気づくことである。また反面、これは当然の知覚の仕組みであるから、このように「部分から全体を直観すること」を貶めて、避けたり否定したりする必要もないといえよう。もし全部が見えなければ「全体」がわからない知覚の仕組みをもっていたら、人間には「世界」という感覚はありえなかったにちがいない。

「(2)『物』の知覚には、中心的対象の知覚とその周りの背景（＝意識の庭）という構図がつねにある」p.48

この「主題－背景」構造は、背景から「主題」になるものが次々に浮かび上がることによって、世界が多数の「視点」に満ちていることを推測させやすくする。世界が奥行きのある立体構造をもち、同時に時間の動きにもなって変化する四次元構造を備えていることを確認する、「人間の住まう世界」の感覚である。

「(3)知覚体験には、ちょうど暗いところを懐中電灯で光をあてて物を見るように、主体の側から『注意を向けること』（＝配意）という側面がある」p.48

「懐中電灯」の比喩は分かりやすいがこれを専門用語で「射映」というらしい。この(3)は、主体の意図的な「意志」によって知覚する世界を動かすことのできることを述べている項目であろう。竹田はこの(1)(2)(3)をひととおり述べたあとで、次のように総括する。

「少し『内省』をやってみると当たり前のことで、誰でも『知覚』という体験を意識現象として見つめると、右のようなことが一般性として言えることが確認されるはずです。フッサールはこうして取り出した事態に、何が取り出されたのかも分からなくなるほどやたら難解な術語をべたべたと貼り付けているので（コギタチオ、コギターツム、射映、背景直観、配意、地平等々）、何か恐ろしく難しいことが論じられているかのようには思えるのですが、こうして整理してみると、その要点はじつにシンプルなものだということが分かります、そして、これが現象学的還元のはほぼ全体像です。」p.48

一見冗長とも勘違いされやすいこのようなことばの挿入が、いかに読み手を安心させ、同時に内容理解を助けるかは、はかりしれない。「やたら難解な術語をべたべたと貼り付け」の一節は垣内を思い起こさせる。次の一節は、たんに「理解」に伴う読み手の不安を慰撫し、わかったという直感を励ますだけでなく、内容理解の確かさにだめ押しの圧力を加える。「だめ押し」は専門家にしてはじめて可能な「全体的視野」を与えることである。

「こんなことが現象学的還元？と拍子抜けする人もいるかもしれませんが。でも、これが『知覚体験』の還元の内実であり、したがって、あらゆる『現象学的還元』の基本型です。フッサールはこの後も、『知覚』についての現象学的還元を延々と続けていますが（『イデーナⅠ－Ⅰ』は、いってみれば、全巻、リングや机といった「感性的事物」の知覚体験についての現象学的還元の書です）、重要な点なので強調しておく、いま示した例が『還元』の核心的な実際例で、あとはそれをどんどん顕微鏡で倍率を上げるように細かくしているだけと言えます。

理解すべきことは、もしこのフッサールの例で、なるほどこれが現象学的還元かと深く得心がいくなら、その人は、あとはどんな複雑な対象でも自分で現象学的還元を遂行していけるし、また、還元とはそのようなものでなくてはならないということです。『還元』とは、いわば現象学的還元という思考ゲームの基本ルールで、このルールさえ理解できれば、あとは誰でも多様な対象について現象学的に考え進めることができる、ということになるわけです。」p.49

この一節は読者に「安心感」を与える働きをもつが、次の一段は逆に「警告」である。

「もう一つその帰結として言うべき重要なことがあります。それは、ここでフッサールが示しているような現象学的還元の実例から『還元』という方法の本質的な意味を受けとることができなければ、フッサールの他のどのテキストからもそれを取り出すことはできない、ということです。言い換えれば、この『還元』の実例の中だけで、われわれは現象学的還元の本質的な意味を取り出すことができるし、それができなければあとは、あれこれ膨大な文献をいじり回すレトリカルなスコラ議論が続くだけだ、ということなのです。」

pp.49－50

「膨大な文献をいじり回すレトリカルなスコラ議論」という表現は痛烈な皮肉であるが、専門外の者をはじき返す「細かな用語の吟味が延々とどこまでも続く」感のある哲学議論に一度でも触れたことのある人間ならば、この一節に快哉を叫ぶだろう。こうして竹田は、いよいよ本当の「核心」に迫る。ここも懇切でないであるが、あえて箇条書き風に要点を列挙してみよう。

①現象学的還元とは、要するに、「体験」あるいは「経験」一般を、「意識の経験」としてもう一度見なおしてみろという作業である。「体験」の種類には、a「身体を動かす」という体験、b「身体でさまざまな物を感じる」という体験などの「意識的な体験」と、これと対照的なc「無意識」体験、d 体験不可能な「死」の観念（死を感じる意識現象）などがある。

②「意識の経験」（意識現象）を“適切に”記述せよ、という主張をしているが、個別の体験は無数の表現様式をもっていて、それを「正確に」記述することは不可能である。従って、記述によって取り出そうとするのは「個別性」ではなく、「意識体験の本質」すなわち、「誰にとっても“共通項”として取り出しうるものがらである。

この②については竹田の次の補説が必要であろう。

「『現象学的還元』は、『私の意識』に生じている体験のありようをやみくもに“ありのままに”記述するものではありません。そんなことは不可能に決まっています。『私の意識』に生じている体験のありようから、他者にとっても必ず生じているはずだと考えられるもの、すなわち共通項と考えられるものを『抽出する』作業、それが還元なのです。」p. 52

ここで読者の一部に起こるであろう疑問、すなわち「他者にとっても必ず生じているはずだと考えられる“共通項”」はどうやって判断するのだろうか、という疑問を先回りして、竹田は次のように言葉をつぐ。

「かつて批評家の柄谷行人は、現象学の方法は自分にとって生じていることは必ず他者にとっても生じていると考える独我論だ、といった気の利いた言い方で現象学を批判しました。しかし、これは『還元』の概念についての素人判断にすぎないことが分かります。自分にとって生じていることが他者にとっても必ず生じているはずだと考える人は、もちろんきわめてナイーブというほかはない。人間の思考や感性はいかにも多様だからです。しかし、自分の意識体験と他者の意識体験のあいだにどんな共通項もない、すなわち本質構造など何一つ存在しない、と本気で考える人がいるとすれば、彼こそまさしく正真正銘の独我論者だということはないのです。じっさいにやってみれば分かりますが、フッサールが行った『還元』を、もっと適切な言葉で修正することはできますが、共通構造など存在しないと強弁することが不可能であることは明らかです。」pp. 52-53

「共通項」もしくは「共通構造」と呼ばれているものこそ、「本質構造」と呼ぼうとするものであることを、ここで言明している。では、なぜ「本質構造」を取り出さねばならないのか。

「もっとも肝要なのは、なぜこのような意識体験の『共通構造』＝『本質構造』を取り出す必要があるのか、ということです。いま『還元』の内実が明らかになりましたが、一体何のために『還元』を行うのか。ここが現象学理解のもう一つの山場です。このことをフッサール自身が適切に説明しておらず、そのためにほとんどの論者がつまづいているところなのです。」p. 53

竹田自身が取り出している「答え」は以下のようなものである。

「わたしの考えを言えば、『確信成立の条件と構造』を解明するため、というのがその答えです。そして、このアイデアが現象学という方法の最大のメルクマールなのです。

この根本アイデアが現象学をして近代哲学の根本問題であった『認識問題』を解明させ、この根本アイデアが、現象学を哲学的思考のもっとも進んだ原理論たらしめているといえる。このことが、これまでのすべての現象学理解にあらがって、われわれが提示すべきと考える根本的理由です。またその意味がはっきりすれば、先に言ったように、現象学研究に蝟集していた膨大なスコラ議論も無意味なものとして消えることになります。」pp. 53-54

ヨーロッパ哲学の「認識問題」の歴史に詳しくない考察者としては、この興奮気味の強調点を読んでも「ああ、そうですか」としか言いようのないところではあるが、それほど重大なことだったのか、と知ることは興味深い。なぜなら、考察者が長く親しみ考え続けてきた、山口喜一郎の「対話」環のアイデアと、垣内松三の「現象学的解釈論」＝「形象理論」を重ね合わせて抽出される「対話環モデル」は、まさにこの「確信成立の条件と構造」の視覚モデルであることがはっきりわかるからである。

竹田によれば、フッサール自身は著書の本文のなかでこのことについて適切な言辞を述べていないものの、『イデーン』『あとがき』ではっきりと、次のように自論の価値への確信を述べているという。

「筆者（引用者注、フッサール本人）は今老境にいたって、少なくとも自分自身としては、完全に、次のように確信するにいたっている。すなわち、自分こそは一人の本当の初心者・端緒原理を掴んでそこから始める人間であると、こう自ら名乗り出てもよいであろう、と。」（「あとがき」44ページ）p. 70

この「確信」の由来について、再び竹田の解説にもどれば、フッサールのアイデアとは、

「第一に、『確信成立の条件の解明』という発想こそが、哲学的な認識問題についての本質的かつ徹底的な解明となるという確信」と「第二に、したがってこの方法はまた、およそ哲学的認識一般のもっとも根底的な原理論になるという強い自覚」p. 71 とまとめられる。

竹田はヨーロッパ哲学における「認識論」の歴史を、56ページから58ページのわずか3ページで縮約的に述べ、何が問題となってきたか、そして現在と未来の問題はなにか、という見通しを描く。その背後には、「ヨーロッパにおける新教・旧教の対立、キリスト教的世界像と自然科学的世界像との対立、ヨーロッパ的世界像と異文化世界像との対立、といった近代特有の世界観の対立の克服という動機があった」（『言語的思考へ』p. 59）という。その中心的な問いを、列挙すると以下ようになる。

＜近代哲学の問い＞

- ① どうしたら、客観（真理＝唯一の正しいもの）をつかめるか。
- ② 主観（自我意識）と客観（真理）とは一致しうるか。（→カントが「一致不能」であることを、証明した）
- ③ では、「共通性、普遍性」はただの幻か。（→幻である。たしかなものではない。）現代の反哲学思想の主張
- ④ では、「普遍性、共通性」は、人間には不要か。→必要だ VS 不要だ
 ←抑圧と争いの原因になるから／人間の自由を侵すから／地球規模の問題を解決できないから
- ⑤ ではなぜ、「主観」（自我）は自らつかんだものを「客観」（真理）だ、と確信するのか。
- ⑥ 「確信」の成立する条件は何か（認識・知識の成立する要件は何か）

上記の⑤と⑥が、「現象学」のモチーフであり、現象学のみがこの問題を解く力をもっている、と竹田は主張する。竹田によれば、一部繰り返しになるが、現象学の主張は以下のようにまとめられる。

「現象学は、これが客観（真実・真理）だ、と思えるものを、その判断をいったん意図的に止めて（エポケー）、すべて「自分の主観にどう捉えられているか」に置き直せ、そして、自分の捉えている事象を克明に記述せよ、というメッセージを出した。これを、「（現象学的）還元」とよぶ。

これが「現象学の核心をなす＜還元＞」の内容であり、これ以上のいかなる神秘性も含まれていない、と竹田は説く。これまで私は、「還元」の意味がわからず、とくに「客観をすべて主観に置き直せ」という指示だとはまったく分からなかった。それがわからないまま、下線点線のみを捉えていたので、「事象の記述」は単なる「解釈」と変わらなかった。また、もう一つ重大なキー概念に「間主観性」という用語がある。

「間主観性」は、「還元」によって明らかにされる「確信成立の条件」としての主観（自我）の視線のもちかたに付された名称である、ということが分かった。「間主観性」は、「還元」によって発見される“見方”をいうらしい。竹田の説くところを、以下のように縮約できる。

間主観性は、客観性のことではない。『あなた（他の人）にも、私と同じように、この・その・あのモノ・コトが見えているにちがいない』という「私の確信」をもつことが、「間主観性」という視点の獲得であり、ものごとに対する「（私の）確信」の条件である。

K. ビューラーの「言語の4相図」の縦列は、左「属主体性＝H（言語活動）／A（言語行為）」、右「間主観性＝W（言語作品）／G（言語規則）」と30年前に授業で習ったが、このとき「間主観性」の意味がわからなかった。主体と主体の間にあること、つまり「客観的存在」ということだな、と常識的に理解していたのを思い出す。長年の宿題が解けた。

ところで、竹田の導きに従って、まがりなりに現象学の全体像をとらえてみると、そこにはまだ「対話環」の考え方は含まれていないことがわかる。竹田が「現象学的還元を実行するとして、しばしば用いる「私の前にある1個のリングが、私にどう見えているか」の記述には、リングというモノと、私という主体が向き合っているのみで、そこに別の主体は関与していない。純粹に、知覚を記述する、という態度が採られているのである。

ところが一方で、そこに「リング」というモノの名称として言語が入り込んでいることも、別の箇所では意識されている。「リング」という名称（言語）は、この「還元」のなかに、いつどのようにして入り込むのであろうか。

「対話環」の働きを長く見つめてきた立場からいえば、この「還元」の中には、もう一人、「あなた」という主体が必要である。「還元」とは、リングの認識とともに「リング」という言葉が獲得される現場でもあるはずなのだ。新しいことばは、単独の主体では獲得できない。このことを考えるのに、矢野智司が『ソクラテスのダブルバインド』でヘレン・ケラーの「言葉の獲得」の仕組みを考察した例が大きな手がかりになる。ヘレンが「ものにはすべて名前がある」という認識と「水」という語を同時に獲得した有名な「井戸端の事件」は、示唆深い。

この獲得には、「サリバン」という教師の存在が不可欠で、サリバンは巧妙なやり方でヘレンの混乱（ミズ、マグ（カップ）、飲む動作と中身の混乱）を切り離し、ポンプからほとぼり出て自分の手にふりかかっているモノが「ミズ」という名称であることを、鮮やかに「わからせた」のである。ちなみにこのとき、同時に連続して、ヘレンは「教師」という語も獲得している。サリバンが、「ことばを自分に分からせるために来た人だ」という理解を、「モノにはすべて名前がある」という認識とともに、ヘレンは同時に一瞬にしてつかんだ。そしてヘレンは、サリバンに飛びつくしぐさで「あなたは何（だれ）？」と尋ねた。もちろんサリバンは自分の氏名ではなく、「教師」と答える。その夜、ヘレンがいままで一度もしなかった「自分からサリバンにキスをして抱きしめる」という行為をしたことが、サリバンによって報告されている。真の認知には感激が伴うのである。

竹田の紹介する「現象学的還元」では、言語は意図的に無視されている。言語以前の「知覚」のレベルでモノを捉えようとしているからであろう。もちろん、言語以前のモノとの関わりを、人間はもっている（ヘレンがそうだったように）。しかし、竹田の言うように現象学のモチーフが「確信成立の条件を明らかにする」ことにあるのであれば、それは主体のなかに「言語」と「認識」が同時に入り込む仕組みを解明することに、深く関わるのではなかろうか。西洋の知性は、「確信」には「他人の視線」は必要でなく、「自我」単独でモノコトが捉えられる、と思っているふしがある。「まず、私が確かにつかんで」、それから「あなたに同意を求め、確認する」という順序が暗黙のうちに前提されているようである。「対話環」は、はじめの言語・認識の獲得において、「私はこれを、（なにものかに）つかませてもらった」という感覚があることを示唆する。この、自分の制御のできない「やってくるもの」に注目することが、「現象学的記述」にとって重要であると、竹田は説いている。

Ⅳ ことばを生み出すしくみー「対話環」

人間の子どもがことばを身につけるには、①ことばが使われている集団の中で育つこと、②子ども自身の脳と感覚器官に障害がないこと、の2条件が必要なことはすでに自明のことである。しかし、①②の条件を満たしていても、子ども自身に向けられていない傍聴・傍観的な「ことば経験」に果たしてどれだけの「力」があるのか、根本的な疑問が生じている。乳幼児の時期から家庭のテレビで浴びるようにことばを聞いて育つ子どもは、「ことば」は「人から人に」向けられるものだ、という感覚を健全に備えることができるのか。保育者から直接かけられることばの何倍もの量を「通り過ぎることば」もしくは「向こうから一方的にくることば」として経験する子どもは、長じてどのような「ことば」と心をもつ子どもに育つか。現代社会はいま、壮大な規模でおそろしい実験を進行させていると見られる。

20世紀初頭から50年間にわたって「直接法」による日本語教育を実践した山口喜一郎は、子どもにことばが生じる仕組みを「対話としての言語活動」に見いだした。山口は、乳児の泣き声やしぐさを養育者が解釈して受けとめ、子どもが満足するように「返す」一連の行為に、「ことば発生の端緒」があると考えた。ソビエトの心理学者ヴィゴツキーもまた、最後の著書『精神発達の理論』（1931稿、1960刊）のなかで、乳児が欲しいものに「手を伸ばすしぐさ」を、「あれが欲しい」という意味（指示）に解釈して応じてやる「おとなの行為」が、無意識的な子どものしぐさを意図的な「指示」に変えるのだと主張して、ここに「ことば発生の端緒」を指摘している。山口の著書では、おとなが子どもの欲求に「応じ」て世話をするとき「ことば」を伴うことを強調しているが、山口の考えで重要なのはむしろ、「ことば」そのものよりも、「子ども→養育者→子ども」という環が成立することを指摘している点である。この輪のでき方は、冒頭で少し触れた「子どもをオンプで育てるか、寝台で育てるか」に関わる。

昭和30年代までは、日本の子どもは母親の背中に「おんぶ」されて過ごす時間が長かった。買い物に行くにも、洗濯をするにも、母親は背中に子どもをくくりつけて仕事をしていた。同僚Y氏は、この「オンプ」によって、子どもは母親と呼吸を合わせることを身体で学ぶ、と主張している。私は、母親の子育て（4歳下の弟をどう育てていたか）を見ていて、弟（赤ん坊）が泣き声を上げると間をおかずに、おしめを替えたりお乳をのませたりするのを当然のことにように見てきた。子どもの私には分からなかったが、泣き方ひとつで「おしめ」が濡れたのか、空腹になったのかが母にはわかった。おそらく当時の母親たちには、この泣き声の聞き分けはごく一般的なことだったにちがいない。ここには、赤ん坊にとって、泣く・あばれる・機嫌を悪くする、といった表現に対して、「ただちに応じてもらえる」信頼の輪が成立していたにちがいない。これは自分の存在に対する基礎的な自己肯定感のもとを形作ったと思われる。ちなみに、西洋では乳幼児を寝台に寝かせ、子ども部屋に入れることが一般的である。例外はあるが、子どもへの世話は「時間を決めて、定期的に」という考え方であろう。いわ

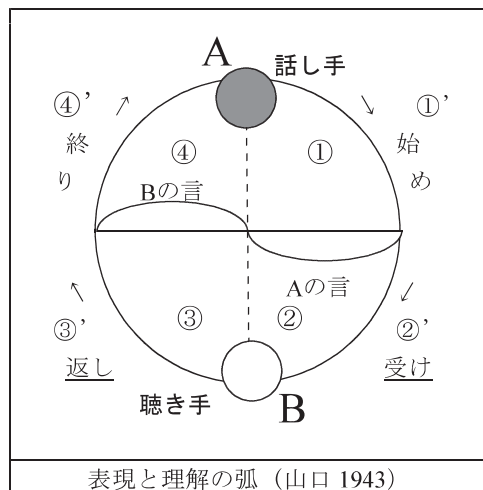
ば、大人の都合優先である。こどもは直観的に、この世は「まず我慢を強いられるところ」であることを身体で覚えるにちがいない。ただし西洋では、成長して子どもが理性的にことばで「要求」を出せるようになると、それを最大限受け入れ、子どもを尊重して育てる。日本では逆に、年齢が上がってから我慢することを厳しく仕込む。身体の内側に「全肯定」の感覚が座っていれば、厳しさに耐えられるのである。また、場の状況や相手の心の内を「察する」感性を要求され、自らもみがいていく仕組みになっている。それは静的なモノの存在よりも、動いているコトを捉える能力をみがくことにつながっている。輪の作り方が西洋とはちがう。

先に述べたように、山口喜一郎は、この「子どもの表現から始まり、大人の反応を経て、子どもに返って閉じる」輪のひとめぐりを、「言語活動の単位」と名付けた。「子どもの表現」が出発点である、との捉え方は、上記の乳児期に始まる子どもの育て方と重なっている。

現象学では、A 私（主体・自我）がここにいる、B ここ（そこ、あそこ）にモノ・コトがある（生じている）、C あなた（他我）がそこにいる、の3項のうち、AとBの関係を追究している。Cあなた（他我）とBモノ・コトとの関係は、「想定されているにすぎない」（確認不能）として、「判断停止」の対象になっているのである。AとCの関係は、モノ・コトの認知のあとに考えるべきものとして取りのけられている。これは、現代思想の言語論が「作者の死」を宣言したことと、関係があるだろう。それは、言語を「間主体的な」言語規則（G）の面から捉え、生活場面の「言語行為」（A）を後回しにする考え方である。オースティンやサールの「言語行為論」は、「言語行為」を対象にしてはいるが、それを「規則」としていかに明らかにできるか、ということモチーフにしている。かれらが命名や約束等の言語行為を言語形式の規則にまで押し詰めて考察した功績は大きい。しかし、生活世界での言語行為の意味は、「言語規則」にのっとった「言語形式」からは導き出せないことが多い。その無理をおかして「規則」にまで仕上げようという意図が「ゲームの理論」の考え方の導入につながるのだろう。矢野智司氏がバートソンの分析を用いながら述べたように、言語（行為）は、すでに身体的身ぶりや表情によって成り立っている行為の上に、冗長を伴う「重なり」として成立するのである。したがって、「言語」が除き去られても「行為遂行」の成り立つ場面は、日常世界には珍しくない。言語は、基盤となる行為遂行をより効率的に、誤りを防ぎ、完全なものになるように使われているのである。

「言語行為論」の言語分析は、規則から行為遂行規則を抽出しようとしているが、この順序を逆転させて、言語行為（A）の成立の過程から、言語規則の生成の仕組みを見取る方が自然な見方ではないか。この場合は、「規則」を行為遂行の指標にできないため、「対話環」が成り立ったかどうかを行為遂行のメルクマールとして用いるのである。聖書の冒頭には「はじめにことばがあった。ことばは神とともにあった。」とあるが、対話環は、「はじめに行為があった。行為は“あなた”とともにあった。あなたとともに遂行した行為がことばを生み出した。」という始まりを導き出すだろう。言語は神から来たのではなく、世界を必死に生きた人間の、生活の必要からもたらされたのである。

V 現象学的「超越」と対話環の形成



<図1>

(1) 主体のなかで起こること

山口喜一郎の「対話環」が、双方向の「コミュニケーション」と異なって、ひとめぐりの「輪」が「閉じる＝つながる」瞬間が重要であることは、すでに既述の論考で述べた。本稿では、それが、現象学でいう「超越」という事態を生み出す瞬間を意味するものであることを、明らかにしたい。

山口喜一郎は、「対話環」の形成について、2主体が、ひとつの輪を共同して創りだすために、互いに「表現の弧」と「理解の弧」を張り合う、と説明した。目的は「共通のひとつの円」を創ることだが、直接にはそれができないので、「言(ことば)」がそれを媒介するのだ、という説明である。また、山口のもう一つの強調点は、Aが表現したものをBが理解して終わるのでなく、Bの返しを経てAが返事を受けとるときに、「言語活動のひとまとまりが終わる」と述べ、このぐるりと一回りした輪を、「言語活動の単位」と名づけた。この「言語活動の単位」こ

そ、ひとまとまりの「言語行為」の遂行が終わったことを意味する。

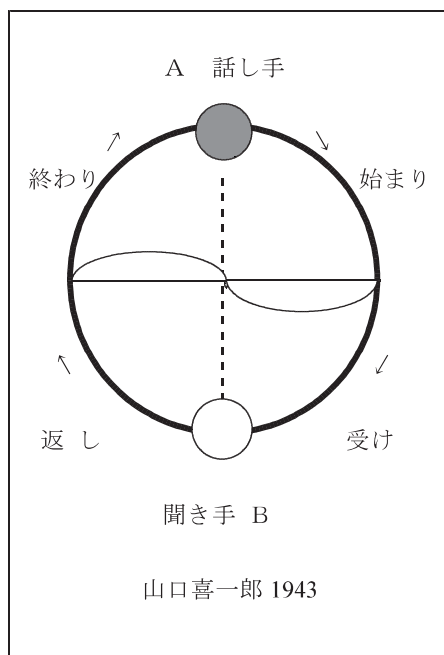
ひとまとまりの「言語行為」が遂行され終わると、あとに、ひとまとまりの「言語テキスト」が残る。これが「言語作品 W」である。そして、言語作品の内部に、それを支えた「言語規則 G」が、実際に使用された状態ですがたを表している。上の図でいえば、その「言語作品」は「A の言」「B の言」として残っている。しかし、 $A \cdot B$ ふたつの言が、「意味」のはたらきを及ぼしている範囲は、円環全体に及んでいる。

現象学では、「間主観的な確信が生まれる仕組み（条件）」を明らかにしようとしているが、この円に示されている①②③④の順序で意味が効果をあげ、④が①の結果（成果）として主体 A に受けとられる、というこの仕組みこそが、「間主観的な確信」のもとである。そこにはもちろん多くの誤解・曲解の可能性がある、A の意図・意味が B に的確に受けとられているという保障はない。A、B それぞれの表現力と理解力が、この円環全体の質を左右するのは当然である。しかし、にも関わらず、A には、確かに「受けとめられた」という実感が生じ、そこに充実感や喜びや不満感などの情感が生じて、それが「生の手応え」となり、A の次の行動（行為）を促す。このとき、A のなかに起こる意識の現象を、「自我を超え出る＝超越」であると考えても、おそらく間違いではなからう。

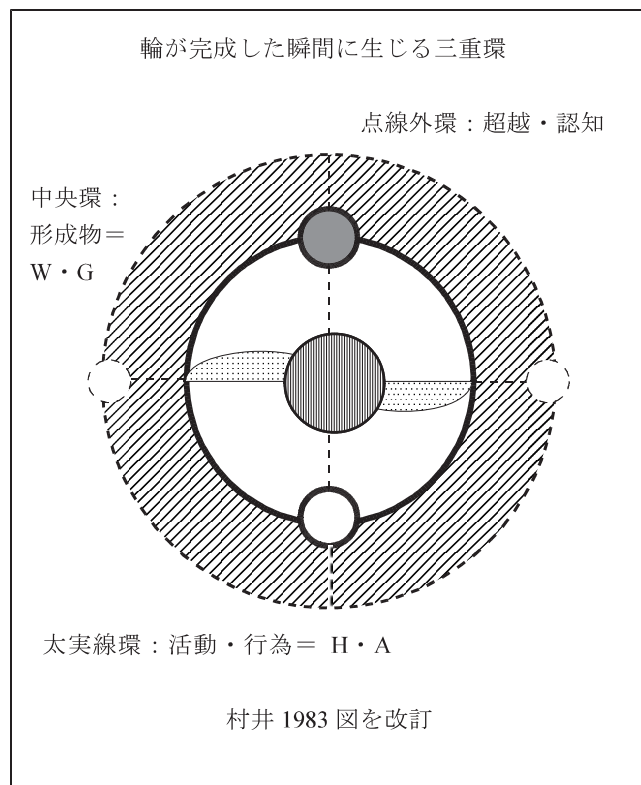
A が、その「手応え」を表現して再度 B に向けて表現をすると、ようやく B のなかにも、同じように自分の「返しの表現」についての“手応え”が生じる。こうして、この円環は1回転半を経ることによって、AB 両者にそれぞれの立場での「達成」を生み出す。これが、A、B 両者に「信じられている」共通認識であろう。

以上の説明は、改めて書き出してみると、ごく当たり前の平凡な事態をなぞったかに見える。しかし、「円環の形成」は、決して自明のことでもなければ容易なわざでもない。主体 A と主体 B とが、きわめて強い意志をもって（明確な志向性、及び周到な配慮のもとに）話し聞き、書き読む「言語活動」を営まねばならない。難易についていえば、円環形成上、より大きな配慮と能力を要請されるのは、主体 B の方であることは明らかである。一般には、「主導権を握る」と称して、A の立場にいち早く立とうとする競争が行われるが、本来、力のある側こそ、B の立場に立つことが要請されるのである。子どものなかに、「わかった」という実感を伴う新しい知識・認識を育てるには、教師は子どもの前に B の立場で立たなければならない。強い者、能力の高い者が A の立場に立つと、2主体は「対等」ではなくなり、B から返ってくる反応についての A の理解が、「検査的な上からの評価」に陥るのである。そこには新たな「共通認識」は生まれず、「超越」は起こらない。B は、A のなかに起こる「超越」を援助し A の成長を楽しむ者、でなければならないのである。

(2) 「超越」の瞬間のモデルー「認識」を主観に置き直す



⇒



垣内松三が「形象理論」のなかで、「叙述を読む（叙述的機構型理解）」「作者の意図を読む（示現的機構型理解）」「作者の背後・創造を読む（象徴的機構型理解）」の3段階の読み（理解）を唱えたとき、教師たちはこの「読みを深める」プロセスに引きつけられた。しかし、その後、文学的文章の「主題」を確定的に読み取ることが不可能である、という考え方が広がり、主題追求は行われなくなった。この動きは思想界で「作者の死」が唱えられたことにはほぼ軌を一にしている。虚構作品への読みの自由を保障するために、この考え方を肯定的にとらえることはできるが、事実を報告・説明・議論する実用的文章にまでこの考え方を及ぼしてはならない。とくに、子どもの書く文章に対して、意図を読み、主題をとらえ、背後を読み取ることが重要である。この分野でこそ、垣内の形象理論はもう一度見なおされるべきであろう。これは、竹田が主張する現象学の見直しと通底するところがある。

上図の三重環は、左図の「A 話し手」のなかで、「輪が閉じた瞬間」に起こることを視覚化した図である。これは、A の主観＝意識でのみ起こることであり、対話環の相手をつとめた「聞き手主体 B」の意識ではない。三重環の最外円が点線で表してあるのは、これが「幻の一瞬」といってもよいほど短時間で消える円だからである。しかし、この最外円の印象は強烈で、A はこのとき、自己を外から（客観的に）捉えたという感覚をもつ。実際の対話では輪の向こう側に位置してよく見えない「相手主体」が、「言」の境界線の延長上に位置を変えてはっきりと見えたというイメージが起こる。同時に、自己（自分自身）も、生身の自分から距離をとり、相手の位置と同じ位置に「見える」感覚が生まれるのである。この“幻の2主体の位置”は、実際の言語行為の全過程を「客観的に」捉える「想定された」位置である。この実感を忠実に記録することが、現象学のすすめる「意識現象の記述」であろう。この、A のなかで起こっている事態を、具体的にとらえることは可能か。現象学が主張するとおり、それは客観的には「不可能」ではあるが、主観的に「想定する」ことは可能である。そして、言語教育においては、この「主観的にであっても」「具体的に想定する」力が必要なのである。なぜなら、これが「対話環」を介して獲得しなければならない「言語能力」だからである。子どもにこの「主観的想定力」を養うには、まず、教師の側に、豊かで強力な「想定力」が備わっていなければならない。この力は、とりわけ「作文指導」において要求される。

Ⅵ 総括

本稿では、前稿で素描した「対話環」の機能について、主に竹田青嗣の現象学の見直しを論じた著書を用いて意味づけを試みた。哲学が展開する論述のきめの細かさにくらべ、本稿はまことに粗いデッサンにすぎない。しかし、竹田の導きによって、長年疑問としてきた「現象学とはなにか」の多くの疑問が氷解する思いがし、このすじみちで現代言語論と各種思想を眺めなおしてみると、気になるさまざまな「異質な考え方」に気を取られずに、行くべき道をまっすぐ進めそうな見通しが立ってきた。

文献：

- 1) 竹田青嗣：2004『現象学は＜思考の原理＞である』ちくま新書393
- 2) 竹田青嗣：1989『現象学入門』NHK ブックス576
- 3) 竹田青嗣：2001『言語的思考へー脱構築と現象学』径書房
- 4) 朝倉輝一：2004『討議倫理学の意義と可能性』法政大学出版局
- 5) ハーバマス著細谷貞雄訳：1975・1999『理論と実践』未来社
- 6) 山口喜一郎：1943「対話に於ける言語活動の特徴」（研究発表記録）；『日本諸学研究報告第二十篇（国語国文学）』1943, 文部省諸学局編纂, PP.290-310
- 7) 山口喜一郎：1953『話すことの教育』習文社（遺稿）
- 8) K. ビューラー：1983『言語理論（上）』脇坂豊・植木迪子他訳、クロノス；KARL. BÜHLER : SPRACH-THEORIE, 1934
- 9) 垣内松三：1977『垣内松三著作集』光村図書、
- 10) 中村雄二郎：1979『共通感覚論』岩波書店、著作集所収1993、岩波現代文庫 G 1 所収2000
- 11) 木村敏：1982『時間と自己』中公新書（第19版1999年2月）

Curriculum Development of Training for Teacher (2)

—— Theory of “Taiwa-Kan” by Phenomenology ——

MURAI Mariko

This article is a Foundation Theory for Curriculum development of Training for Language Teachers.

This is 3 subjects. 1 : In the Past Article, I maintained that we need to detect the philosophy on Speech Theory “Taiwa-Kan : the unit of discussion Loop”. “Taiwa-Kan” came from Yamaguchi-Kiichiro’s Theory (1952). The Theory “Taiwa-Kan shuld be founded by Phenomenology. 2. “Gensyougaku wa Shikou no Genri dearu-Phenomenology is the Principle of Thinking” described the history of modern philosophy and cleard that Phenomenology is important theory. 3. The found theory of Teaching for 1st Language needs Theory of “Taiwa-Kan” by Phenomenology. Because we know that the theory is How to cross over the Oneself.